

熱が出た

逆に36度未満の低体温にも注意!



小児救急電話相談
「#8000」を活用
しましょう(P1参照)

受診前には必ず確認の電話を病院へ!
解熱剤の座薬や頓服をいつも家にストックしてね!
これは痛み止めとしても使えます。
大人に使う薬は子どもには代用禁とします!



「顔色不良」なっえ
「顔面蒼白やチアノーゼ」
「呼吸が弱い」
「意識が無い」
「言動がおかしく」
「視線も合わない」
「5分以上のけいれん」
などの時は
救急車を!

発熱は体の負担となりますが、防衛反応のひとつです

人間はウイルスや細菌などの病原体に感染すると熱を出して、体内に入り込んだ病原体の活動を抑えようとして、平熱よりも1度以上高く、環境を整え、時間をおいても下がらないなら発熱といえます。他にもいっと違ふ様子が無いか確認しましょう。(普段から体温をはかり平熱を知っておくことも必要です)
赤ちゃんは体温調節機能が未熟なため、室温や衣類の着せ方によって体温が上がることもあります。

発熱で一番怖い病気の代表が『髄膜炎(ずいまくえん)』です

発熱+嘔吐+頭痛(赤ちゃんなら不機嫌・不活発)と3つ症状が揃えば『髄膜炎』の可能性があります。髄膜炎の場合、頭や首などが痛くて首を前に曲げにくくなります。ですから、もしお子さんが、お気に入りのおもちゃを下に置いて、あごが胸に付くくらい視線を落っこし、機嫌よく遊べていられれば、髄膜炎の可能性は低いと思います。ただし乳幼児期にはそつという症状が出る場合もありますので、3つの症状がある場合は早期相談・早期受診が必要です。

★子どもの急な発熱で受診をした方が良いか悩んだときは、小児救急電話相談「#8000」を利用しましょう。(詳しくはP1を参照)

熱が下がった

様子を見る

★逆に36度未満の低体温の時も要注意・要相談!

37.5度以上
38度未満のとき

発熱以外はいつもと変わらない
機嫌・活気・哺乳力も普通で
顔色も良く、周りに興味を示す

診療時間内にかかりつけ医院へ



尿路感染症・脱水の診断に役立つ尿検査

オムツをしている子の尿採取方法
受診前に自宅でセットしておく
受診時の尿検査がスムーズです。

機嫌が悪い、または
発熱以外にいつもと
様子が違う

診療時間外でも電話相談して
受診場所や時間を決めておく
(左記の月例別対応や他症状の
チャートも参考に)

発熱以外にいつもと
変わらない
機嫌・活気・哺乳も
普通に興味を示す

重症感が無くても時間外でも
(必ず電話相談して)小児科を
受診すること
発熱以外にも症状の悪化があれ
ば速やかに小児科を受診する
1か月未満の赤ちゃんは入院に
なることが多い

赤ちゃんが生後早期
(0~3か月)
(通常3か月未満のこと)

機嫌が悪い、または
発熱以外にいつもと
様子が違う

出来るだけ早く小児科を受診!
救急車の必要があるかどうかは
上のイラストの
コメントを参考に!
わからない時は電話相談!!

赤ちゃんが4か月以上

発熱以外にいつもと
変わらない
機嫌・活気・哺乳も
普通に興味を示す

診療時間内にかかりつけ医院へ

機嫌が悪い、または
発熱以外にいつもと
様子が違う

診療時間外でも電話相談して
受診場所や時間を決めておく
(発熱対応や他症状のチャート
も参考に)

✓ 医師に伝えること

- ・熱は何度あるか
- ・熱はいつごろからか
- ・熱以外の症状について
- ・食事や水分は取れているか
- ・おしっこが出ているか

尿検査の重要性

尿の(回数や量・色の濃淡などの外観も含め)検査は、患児の情報を沢山知ることが出来る宝の山です。点滴が必要なくらいの脱水かどうかの判定や、尿路感染症・腎炎などの診断のために非常に重要な情報を与えてくれます。通常の尿検査は痛くないため、子どもさんへのストレスが少なく、その上、情報量の多いお得な検査なのです。

全てのチャートはあくまでも目安です。症状は人によって異なるため様子をよく観察し、心配な時は受診すべきかどうかを電話で相談しましょう。